

Digraph ‘gh’ 発達に 関する史的考察

辻 前 秀 雄

Jones 発音辞典には約400の ‘gh’ words が収録されている。ただし、そのうち半数が **Edinburgh, Raleigh** などの固有名詞である。¹⁾ これらの固有名詞と、**derivatives, compounds** などを除いて、全数90の‘gh’独立語を抽出することとした。

‘English spelling is by far the worst, the most inconsistent of all spellings.’²⁾ といわれるごとく、英語の綴り字はきわめて不統一であり un-phoneticである。中でも特色ある‘gh digraph’³⁾ について、実際に音と綴りの変せんをたどり、そこからいくつかの法則性を見いだそうと考えたのである。

本稿に使用した略号は主として研究社「英語学辞典」によった。おもなものは次のとおりである。なお、語学書などの略号は末尾の参考書目に付記することとした。

Du	Dutch	ModE	Modern English
E	English	OE	Old English
F	French	OF	Old French

- 1) Jones には ‘gh’ word の固有名詞が約 200語収録されているが、そのうち、地名に関しては後にふれることにする。(本文 pp. 142~143参照)
- 2) Cf. Robbie, *Spelling* p. 2
- 3) ‘gh’ 音の3/4が mute であるので、厳密には digraph と言えないかもしれぬが、Vallins (*Making & Meaning*, p. 115) も使っているので便宜上これを使用することとする。

G	German	OHG	Old High German
Goth	Gothic	ON	Old Norse
Ir	Irish	PE	Present-day English
L	Latin	Sc	Scottish
ME	Middle English		

NED *A New English Dictionary.*

COD H. W & F. G. Fowler, *The Concise Oxford Dictionary.*

UED H. C. Wyld, *The Universal Dictionary of the English Language.*

NID Webster, *New International Dictionary.*

発音記号は主として Jones, *English Pronouncing Dictionary* 第12版(1963)により、特に必要なきかぎり **broad notation** を用いた。

1

具体的な考察にはいる前に、便宜上まず **digraph 'gh'** の発達を概観してみよう。

OE 書体のうち、現在の **g** に相当するものが **yogh**¹⁾ とよばれるアイルランド借用文字である。活字の関係でこれを代用的に **ȝ** であらわす。(ME **ȝ**)

OE **ȝ** の音価は ① **stop [g]**²⁾ ② **open consonant** として 2 種、[j] および **fricative [g]** ([**ʒ**] または [**ʝ**] であらわされる) であった。**Fricative [g]** は **yogh** が語頭にあって、次に **back vowel** が来る場合の音であったが、しだいに現在の [g] 音に近くなり、この音をあらわすのにノルマン征服後にはいった **g** の文字を用いたのである。³⁾

1) **yogh [jɔx]** n. The middle-English letter **ȝ** used for certain values of **g** & **y**. [prob. f. ME **ȝoc** **yoke**, as beginning with the sound] (COD) ME **ȝ** だけを **yogn** と呼ぶべきであるらしいが、ここでは両方を含めることとする。

2) Jespersen, *M.E.G.* I. §2. 312. の用語。本稿では一般的な 'plosive' を用いる。

3) 安井稔「音声と綴字」p. 6 参照。

ME の yogh は OE yogh から発達した音のうち、このいわゆる **plosive** [g] 以外のものをあらわした。ノルマンの影響によって、フランス語では g は [g] と [dʒ] の 2 音価に用いるようになったが、英語の ʒ は [j] と ʒt の二重字で [ç] [x] 音をあらわした。¹⁾ 13C 以後 yogh ʒ が脱落し、yogh [j] は y に代り、²⁾ yogh [ç] [x] は gh で示すようになった。

Guttural sound が enough, laugh, tough などの [f] 音, high, night, daughter などの mute に変化していったこと、さらにはまた, ghost, aghast, gherkin など gh [g] 音の特例などについては以下の各論で述べることにする。スコットランドでは 15C にはいっても yogh ʒ が続き、活字の不足から z で代用した。このため, Menzies, Dalziel などの固有名詞、あるいは gaberlunzie などの語を残している。

なお, guttural sound はほとんど [f] 音, または mute に変化したが, Sc. loch [lɔx] が Anglicize されて [lɔk] となったように, Sc. hough [hɔk], Ir. lough [lɔk] ([lɔx] も Jones に見られる) も残存している。³⁾

2

PE における 'gh' 音は結局 [g] 音, [f] 音, および mute に大別される。

Jones から前述の範囲内で抽出した 'gh' 独立語は全部で 90 語である。これらをいま上記 3 音に分類すると次のようになる。

1. gh [g] 音語	14	} 計 90語
2. gh [f] 音語	10	
3. gh-mute 語	62	
4. その他の音	4	

1) Cf. OE *nihht* > ME *nist* [niçt] > ModE *night*

2) Cf. ME *das* > ModE *day*

3) Cf. Webster, *Pronunciation* XIV

3. の黙字語が全体の%以上を占めるので後にこの語群はさらに細分することにするが、以下項を追って、これらのおのおのについて、**spelling** と **sound** の両面から具体的に掘り下げてみたい。

gh [g] 音語 (14語)

aghast, burgher, drogher, ghastly, ghee, gherkin, ghetto, gnost,
ghoul, larghetto, narghile, spaghetti, yataghan, yoghurt

OE **yogh** があらわした **fricative** [g] が ME では現在の **plosive** [g] に代り、文字もノルマン征服によってもたらされた **g** を用いるようになったことは前章で概観した。

また逆に、**'gh'** digraph は ME で [ç] 音 [x] 音をあらわすために **yogh**₃ にとって代り、この [ç] [x] 音がのちに [f] または **mute** に変わったのであるから、Mod E 以降において **'gh'** combination と [g] 音の結びつきは起り得ないはずである。

PE において、Jones に上記14語が見いだされるのはまったく異なった経路によるものである。その由来は2つに分れる。

1. は Caxton (? 1422—1491) の媒介によるオランダ語の影響である。Jespersen¹⁾ によれば **g** 字音の **'ambiguity'** を除くための方法であって、Caxton がオランダ滞在中になじんだ **'gh'** spelling²⁾ の輸入によるものとされている。いわば全く不必要³⁾ な輸入である。しかし Skeat⁴⁾ はこの **'gh'** は **hard 'g'** を示すという意味である程度役だつとっている。

上表の **aghast, ghastly, ghost** がこれに属するが、Caxtonにはこの外にも **ghoos**(=goose), **ghes**(=geese) などがある。

1) Jespersen *M.E.G.* I. §2. 314.

2) Du. では **fricative** [g] を示すのに **'gh'** を用いていた。

3) Webster, op. cit., **'gh'** in *aghast, ghastly, ghost*, is a useless spelling for "hard" brought from Netherlands by Caxton.'

4) Skeat, *Principles*. Ist Series p. 322n.

N. B. ghost <OE *gást*, ghastly <ME *ghast-ly* (=terrible) <OE *góst-an* (=to terrify). (cf. G. *Geist*) aghast <ME *a-gast* の a- は p.p. を示す prefix である (cf. ago)。この語は15Cの始めに Sc. で見られたが、18C以後までは一般には用いられなかった。

Gherkin, burgher, drogher の3語は Caxton には関係がないが、同じくオランダからの借入語である。

N. B. ① gherkin <Du *gurkje* 'small cucumber'

② burgher <Du *burger* (cf. G. *Bürger* E. borough) 'town-dweller'

③ drogher <Du *droogen* (cf. E dry) 'a drier'

なお、Initial g は Skeat のいう hard 'g' で、そのまま残っていったのであるが、上記のごとく不必要に 'gh' と書かれるか、あるいは guest のように 'gu' となった。90語中 'gh' が語頭に来るのはこの項の6語だけである。

2. はオランダ語以外の外来語である。

上記の Du 関係語とあわせて、結局 gh [g] 音語は gh 語群の中からいっても、PE 全体からいっても例外語と考えてよいわけである。

N. B. ① ghee <Hindi *ghi* 'clarified butter'

② ghoul <Arabic *ghūl* 'evil spirit'

③ narghile <Persian *nargileh* 'hookah, oriental tobacco-pipe.'

④ yataghan <Turkish *yataghan* 'Mohammedan sword'

⑤ yoghurt <Turkish *yoghurt*, via Bulgarian *jugurt* yoghurt, jogurt の綴りもある。

⑥ ghetto, larghetto, spagetti, はいずれも Italian-loan である。

この場合、hがないとイタリア語では [dʒ] となる。

3

gh [f] 音語 (10語)

chough, clough, cough, draught, enough, laugh, rough, slough,
tough, trough

ME yogh[ç] [x] がghで示されるようになり、それが [f] 音または mute になってきたことは前に略述したが、Wyld¹⁾ にしたがって、いま少しくこの経過を追ってみよう。

Wyld によれば、back-open consonant の h, gh 音は音節の終り、あるいは -t の前で、全く消失した (South) か、あるいは f 音となった。

消失に関しては次項で述べるとして、後者 [f] 音への変化は、強い 'labializing' の結果として、back consonant がしだいに弱くなり、ついには全く失われ、そのあとに、lip-open consonant がはいり、一般の傾向によって、lip-teeth [f] になった。しかしロンドン英語でも 15C 以前にはまだじゅうぶんには形成されていなかった。

Spelling-f は *thorf* through (1465), *troff* trough (1553), *laffe* laugh (1563)などにみられた。

さらに -ht は -ft となり、*after* と *daughter* との rhyme(1604) もみられ、*dafter*(1626) の綴りも現れた。17C の終りごろまでは *daughter* には、*dater*, *daughter*, *dafter* などさまざまな綴りが用いられていたようである。Wyld によれば、PE において一方で *slaughter* [sló:tə] をもち、他方で *laughter* [lá:ftə] をもつのは、たしかな理由はなく、全く偶然によるといっている。

ちなみに、-gh を -th で代用することもあった。*Edynburth* Edinburgh, *sith* sigh などがそれである。また *Keighley* [kí:ðli] もそのなごりである。

1) Wyld, *Colloq. Eng.* pp. 287~289.

なお, laugh, draught 以外に共通な -ough の綴りは後述の mute 語の場合と同じく, ME *-ugh*(OE *-uh*), *-ogh* (*-áh*), *-oogh* (*-óh*) が併合したものである。

N. B. ① chough [tʃʌf] : cf. Du *kauw*, OF *choue* 'red-legged crow'

② clough [klʌf] <OE *clóh*, cf. G *Klinge* 'ravine'

③ cough [kɒf, kɔ:f] <OE *hwóstan* ME *kuchen*. Skeat によれば Dutch origin で, Low G からの借入語である。ちなみに hiccough [híkəp] は cough との誤った類推によるもので 'hiccup' が正しい echoic formation である。

④ draught [dra:ft] <ME *draught* OE *draht*. この群で -t を有する唯一の語である。Suffix -t は -th に代って, f, gh, n, r, s, の後に現れたものである。この語は draw と cognate であり, また draft なる phonetic spelling ももっている。

⑤ enough <ME *i-noh* OE *ge-nóh* Goth *ga-nohs* OE initial *ge*>e にしたがって OE *ge-nóh* から *e-nough* となったもの。

なお, enough と enow の関係については, 古くは形態上の区別があり enough は Sg. に enow は pl. に使用された。この区別は Sc dialect に守られているが, Chaucer の時代から無視されはじめ, 19C 以後は数の区別なく, enow は現在 archaic, dialect となっている。

⑥ laugh [lɑ:f] <OE *hlehh-an* late ME *lāf* [læf]—[læf]—[lāf] の母音変化による。Lauf という diphthongized spelling においても [au] という発音は一度も生じなかった。

laughter <OE *hlehtor*, *hleah-tor* は Aryan suffix *-tro* より生じた。

⑦ rough <OE *rúh* cf. Du *ruig* G *rauh*

⑧ slough : cf. Low G *sluwe* ('husk') 'snake's cast skin' 次項 mute 語の slough [slau] 参照。

- ⑨ tough < OE *tōh* cf. Du *taai* G *zäh(e)*
 ⑩ trough < OE, Du, ON, G. *trog* この語は *tree* と *cognate* である。

4

gh-mute (62語)

bight, bright, delight, dight, fight, flight, fright, knight, light, might, night, plight, right, sight, slight, tight, wight, wright
 high, nigh, thigh, sprightly

eight, freight, heigh, height, inveigh, neigh, neighbour, sleigh, sleight, weigh ; straight

aught, caught, daughter, distraught, fraught, haughty, naught, slaughter, taught

borough, bough, dough, furlough, plough, slough, thorough, though, through ; burgh

bought, brought, dought, drought, fought, nought, ought, sought, thought, wrought

前にも述べたように *back-open consonant* の *h, gh* は音節の終り、または *-t* の前で [f] 音に変わるか、全く消失したが、この後者の場合、すなわち、*gh-mute* について、ふたたび *Wyld* によってながめてみる。

この語群の主力である *-ght* の場合を中心に考察すると、まず 2 つの場合

1) *Wyld, op. cit., pp. 305~306.*

がある。

1. front vowel が先行する場合……night, light, etc.
2. back vowel が先行する場合……daughter, bought, etc.

1. の場合は gh 音は少くとも15Cまでに南部英語で消失した。

2. ではさらに2つの発達があった。

- (1) -t の前で完全に消失。
- (2) [f]音に変化。(前項参照)

これらの音変化は spelling の上でもあらわれ ME と PE とで交錯した現象を見せている。

すなわち, *wright* write (1461), *quight* quite (1528), *lyte* light, *whight* white(1557), *baight* bate(1577) etc.

以上は front vowel の場合であるが, back vowel においても, *broute* brought,(13C), *dowter* daughter(1400), *foghte* foot, *kawt* caught(1450), *abaught* about(1499), *dought* doubt, *dater*, *datter*(159—), *slater* slaughter(1656), *doter* daughter (1653) etc.

以下, gh-mute を上表に細分した順に個々に考察してみよう。

A. -igh(t) 語群 (22語)

bight, bright, delight, dight, fight, flight, fright, knight, light, might, night, plight, right, sight, slight, tight, wight, wright, high, nigh, tigh, sprightly

この語群は最後の4字を除いてはほとんどが 'ight' spelling であり, しかも全部例外なく [-ai(t)]である。't' は Aryan 'ti' からきたものだが, 英語にのみ現われ, -th, -d, -tとなったもの。(cf. birth, deed)。

この'gh' mute は front vowel が先行した場合における消失群である。

いま代表的に night の spelling の variant を NED によってたどってみる。

OE	<i>niht, nyht, neaht, næht,</i>
MDu	<i>nacht</i>
OS	<i>naht</i> (MLG <i>nacht</i>)
OHG	<i>naht</i> (G <i>Nacht</i>)
ON	<i>nátt, nótte</i>
Goth	<i>nahts</i>
Norw	<i>natt, nott,</i>
Sw	<i>natt</i>
Da	<i>nat</i>

naeht (c. 825), *niht* (886), *næhtes* (c. 950), *neaht* (1000), *nihte* (1055), *nahht* (1200), *niht* (1225), *nith* (1300), *nyght* (1422), *nyghte* (1490), *nyght* (1548), *nycht* (1566), *niht* ('Hamlet')

N. B. ① *bight* < OE *byht* cf. G *bucht* O Teutonic *bugan*

② *bright* < OE *beorht* O Teut *berhtoz* Aryan *bhrag-* cf. L *flagrare*

③ *delight* < ME *delit* OF *delitier* L *delectare* この語は *sprightly* と同様にフランス系であり, *delite*, *spritely* となるべきところを *light* にならって *mis-spell* されたものである。

④ *dight* < OE *dihhtan* L *dictare* cf. G *dichten*

⑤ *fight* < OE *feohtan* ME *fehtan*, *fihten*

'gh' word は後節の 'ought' の示す p.p. の外は Verb が少ないので, ここで Verb としての *fight* について考察しよう。この動詞は strong Verb drink-class に属するもののうち, 語幹が [lk] あるいは [r] [h] + consonant で終るもの約15語のうち現在まで残った唯一の動詞である。その four principal parts は次のとおりである。(cf. *fought*)

OE *feohtan—feahht—fuhton—fohten*

ME *fihten—faught—foughten—foughten*

- ⑥ flight < OE *flyht* O Teut *fleugan*
- ⑦ fright < OE *fryhto* これは *fyrhto* の 'metathetic' form である。cf. OE *forht* G *furcht*
- 'metathesis' は 'r' がその前後の母音と字位を転換もることであって、後述の through—thorough もこれによって生じた。cf. OE *thrid*—third
- ⑧ knight < OE *kniht* Du & G *knecht*, 'lad, servant, soldier'
- ⑨ light < OE *līoht* cf. Du & G *licht* GK *leukos* 'white' L *lux* 'light'
- ⑩ might < OE *mīht*, *meht*, *meaht* Weak Verb give-class でただ一つ残った *may* (< OE *magan*) の preterite から ME *mīht*, *mought* が生じ、前者が PE の *might* となり、後者は17C ごろまで用いられ、今日では dialect に残っているのみである。
- ⑪ plight < OE *pliht* cf. Du *pligt* G *Plicht*
- ⑫ right < OE *riht*, *rihtan*, *rihte* Du & G *recht* L *rectus*
- ⑬ sight < OE *sīh-t*, *ge-sīh-t* または *ge-sīh-th*, *ge-sīeh-th*
- ⑭ slight < ON *slétt*, Du *slecht* G *schlecht*
- ⑮ tight < ME *thight* ON *thétt*
- ⑯ wight < OE *wīht* cf. Du *wicht*
- ⑰ wright < OE *wyrhta*
- ⑱ high < OE *héh*
- é は long 'e' を示したが, guttural sound の変化により *hegh*, *heigh*, *hey* などを経て *hy* となり, 母音も [i:] から [ai] に変化した, guttural 音のなごりをとどめて, *high* の綴りを保ってきた。
- ⑲ nigh < OE *néah* cf. Du *na*
- ⑳ thigh < OE *théo(h)* cf. Du *dij*
- ㉑ sprightly < ME *spryt* cf. MF—F *esprit* E *sprite*

spirit と cognate であり, delight の項で述べたように, misspelling によってできた語である。

B. -eigh(t) 語群 (11語)

eight, freight, heigh, height, inveigh, neigh, neighbour, sleigh, sleight, weigh ; straight

このグループでは 'gh' 音とともに母音の混乱が生ずる。すなわち, height [hait], sleight [slait] の例外音に対して, 逆に文字の例外としてここに含めた straight が [streit] と発音されることである。height は *high-th* であったのが, f, gh, n, r, s の後の -th に -t がとって代ったもの。OE *héhtha*, ME *hesthe*, *hizte*, 後に *highth* (Milton) を経て, 現在の height の綴りに帰ったもの。[ai] の音は両者, high, sly の影響によるものである。

straight の 'ai' は ME においては [ai] であったが, [æi] を経て17C ごろから [ei] となったと考えられる。

N. B ① eight < OE *ahta*, Du & G *acht* cf. L & GK *oktō*

② freight < MDu *vrecht*, *vracht* の variant であると推定されている。後述の *fraught* と cognate である。

③ heigh : Interjection で heigh-ho の compound でも用いられる。

④ inveigh [invéi] < L in+ *vehi* passive of *vehere*, *vect* 'carry'

⑤ neigh < OE *hnægan* cf. MHG *nêgen*, imitative

⑥ neighbour < OE *néah-ge-búr* ú は long 'u' であったが, アクセントと長さを消失して, 音が indefinite となったもの。 *néah* (*néh*) > nigh

⑦ sleigh : Du *slee* の借用のようで, この 'gh' も前記 *delight* と同様に reverse spelling であって, 'gh' が発音されたことは一度もない。

⑧ weigh < OE *wegan* 'carry' cf. Du *wegen* 'weigh' G *bewegen*

'move', *wägen* 'weigh', L *vehere* 'carry'

C. -aught 語群 (9 語)

aught, caught, daughter, distraught, [fraught, haughty, naught, slaughter, taught

この語群の '-aught' は後述の特殊な Interjection 'faugh' を除いては全部 [ɔ:t] である。

slaughter と laughter の分岐に関しては前述したが、要するにこの一群は次の '-ough(t)' group とともに, -(g)h+t' に back vowel が先行したときに生ずる 2 つの変化, すなわち, ① 'gh' 音の消失, ② 'gh' [f] 音への変化の前者に属するもので, いずれが前者, いずれが後者かの分岐には偶然によるとしか思われないと述べてきたとおりである。

代表的に daughter を取りあげると、綴り字と音の変せんに関しては前にも記したが、OE *dóh-tor*, Goth *dauh-tar* 'milker' で Skr. *duh*, 'to milk' にさかのぼる。suffix *-tar* は 'one who bears aids' の意である。

N. B. ① aught < OE *áwíht*, *áht*

② caught: cf. catch ME *cachen*, ONF *cachier*

③ distraught: obsolete *distract* の variant で L. *distractus* に由来する。

④ fraught: obsolete *fraught* の p.p. で MDu *vracht* から来たかと推定されている。(cf. freight)

⑤ haughty: older *haught* の発展したもの F. *haut* から来ている。

⑥ naught < OE *náwíht*

⑦ slaughter < OE *sleah-t* が Icelandic *slá-tr*, Scandinavian *slaugh-ter* と confuse したものの。

⑧ taught < OE *getáht*, *getáht* cf. teach < OE *téhte*, *táhte* ME

taughte, tahte

D. -ough 語群 (10語)

borough, bough, dough, furlough, plough, slough, thorough,
though, through; burgh

C-group と同じく ‘-(g)h+t’ において back vowel が先行して ‘gh’ 音が消失したグループで次項とあわせて ‘-ough(t)’ は 20 語あるが、次の ‘ought’ 群が音声面でも、また語の機能面でもだいたいそろっているのに対し、この ‘-ough’ 群は音声的にも異質なものが多いため分離して論ずることとした。

なお、最後にあげた burgh は綴りも例外であるが、borough との関連でここにあげることにした。

‘-ough’ -spelling は ‘-ugh, -ogh, -oogh’ の統合と、同時にまた ‘gh’ 音の消失が ‘compensation’ の原理によって先行母音に影響を与えたために生じた。

すなわち、本来 *through* (<OE *thruh*) となるべき語が *through* となり、*thurgh* (<OE *thurh*) となるべきが *thorough* と変わったわけである。また *bóh*>*boogh*, *plóh*>*ploogh*, *slóh*>*sloogh* は ‘oo’ がさらに ‘ou’ に変化して *bough*, *plough*, *slough* となり、これは regular であるが、*dáh*>*dogh*, *théah*>*thogh* となるべきところを、*dough*, *though* となったのは ‘inexact’ であると Skeat¹⁾ は言っている。

N. B. ① *bough* [bau] <OE *bóg, bóh* cf. G *bug*

② *dough* [dou] <OE *dáh* cf. G *teig*

③ *furloogh* [fú:lou] <Du *verlof*

④ *plough* [plau] <OE *plóh* は Scandinavian からの唯一の借用語であり、*plow* と cognate である。

1) Skeat, *Principles*, p. 361.

- ⑤ slough [slau] <OE *slóh* 'mire' (cf. slough[slaf])
- ⑥ through [θru:] と thorough [θɹrə] は本来同一語 OE *thurh* で後者が old strong form で、正規の音声変化で thorough となった。through は weak で、OE では *thur* となっていたが、[r] の 'metathesis'¹⁾ により、1300年ごろ *thru, thruh, thro* となったもの。
- ⑦ though [ðou] <ME *thogh* cf. ON *thó*, Du & G *doch*
- ⑧ borough [bɹrə] <OE *burg* ME *burgh, boru*, OS & OHG *burg*, Goth *baurgs*. burgh [bɹrə] は borough の Sc. variant である。

OE *burg* は 'fort' を意味し、East Yorkshire への Norwegian influence によって、現在地名として、'-burg, -brough, -burgh, -borough, (-bury)' の suffix で至るところに残っている。²⁾

Jones にも前述のとおり、相当数の 'gh' 地名を集録しているが、参考までに Cassel の *New Atlas*³⁾ によって地図の上で目にふれる地名を列挙してみる。

Scotland :

Branderburg, Edinburgh, Fraserburg, Jedburgh, Musselburg, Newburg, Roxburg, etc.

England & Wales :

Bamburg, Guisborough, Middlesbrough, Scarborough, Sedbergh, Londesborough, Brough, Conisbrough, Mexborough, Flamborough, Goldsboro, Knaresborough, Dewbury, Littleboro, Bromborough, Gainsborough, Stallingboro, Billingborough, Loughborough, Shrewsbury, Wednesbury, Kingsbury, Narborough, Tutbury, Peterborough, Attleborough, Narborough, Happisburgh, Harborough, Oldbury,

1) 本文 p. 138 参照

2) Ekwall, *Oxford Dict. of Eng. Place-Names*. Introduction.

3) Cassel's *New Atlas of the World*, Cassels & Co. Ltd., London, 1961

Desborough, Blythburgh, Wellingborough, Hartlebury, Tenbury, Fladbury, Aldeburgh, Sudbury, Banbury, Tewkesbury, Tollesbury, Tetbury, Ramsbury, Amesbury, Queenborough, Southborough, Crowborough, Wisborough, Pulbrough, Mexborough, Bromborough, Newborough, Loughborough, Shrewsbury, Narborough, Chirbury, Clunbury, Oldbury, Banbury, Avebury, Gladstonbury, Bigbury, etc.

E. -ought 語群 (10語)

bought, brought, doughty, drought, fought, nought, ought, sought, thought, wrought.

‘ough(t)’ の音と綴りに関しては、すでに述べたので、ここでは特にこの語群の機能上共通な、verb の p. p. form という点を中心に考察してみたい。(fought については fight の項参照)

これに該当する語は10語のうち、次の5語で、いずれも共通のグループである。

buy—bought	bring—brought	seek—sought
think—thought	work—wrought	

これらの動詞は Infinitive の母音と Pret., p.p. の母音が異なっている。これは Primitive Teutonic の時代からの相違で、Pret. および p.p. が *i*-Umlaut を有せず、Infinitive にそれがあったために生じた vowel の相違が今日まで伝わったものである。

OE にはこの種の動詞が約20ほどあったが、MEになると、一部が obsolete となり ME, early Mod E では一部が Weak Verb の analogy で規則形となった。dwell, quell, reach, stretch 等がそれで、その一つ、work の p. p. wroughtがAdj. として現在に残っている。

今日まで古い形をとどめているものは本項に含まれる bought, brought,

thought, sought の外に, sold, told がある。

なお, 'aught' 項の taught, caught は新しくこの種類に加わったものであり, 特に catch は13CにFから輸入されたものである。

N. B. ① doughty [dóuti] <OE *dohtig*, variant of *dyhtig*

② drought [draut] <OE *drúgad* cf. *dryge* 'dry' この語には drouth もある。

③ nought <OE *nówiht* (*ne* 'not') cf. aught, naught

④ ought <OE *áhte* Mod E ought は owe とともに OE *ágan* から生じた。Verb *ágan* の OE form のうち, Pres. Sg. *ág, áh* から owe が, Pret. *áhte* から ought が生じたのである。

以上われわれは 'gh' 語群のあらわす 3つの音, すなわち [g] [f] 音ならびに mute について考察してきたのであるが, その外に例外として次の 4語があげられる。

その他の 'gh' sound :

hough [hɔk]

lough [lɔk, lɔx]

faugh [pɸ:, fɔ:]

ugh [wɪx, uh, wɜ, ɔx, uɸ, uh, ɜ:h]

後二者は Interjection であるので, いろいろな近似音が考えられるわけでこれは別として, 前二者については, 前にも少しくふれたが, yogh の guttural sound [x] を Anglicize した音であり, 古い音を止めていることで, 音声学上貴重な語と言えよう。

N, B. ① hough <OE *hóh, hǒ* 'heel' ME *hóh* この語の発音は Southern form 'hock' の影響である。

② lough : Anglo-Irish 'loch', cf. loch [lɔk, lɔx] <Gaelic *laough* 'lake', 'a lake in Scotland'

5

Jones に収められた ‘gh’ 独立語90について、以上、語源、綴り字の変せん、音声変化などの面から検討を加えてきた。結果的にその集計をしてみると次のごとくなる。

‘gh’ word 90語

1. Spelling について

(1) Digraph ‘gh’ の位置による分類

語頭にある語	6 (7%)
語中にある語	19 (21%)
語尾にある語	65 (72%)
(t を含む)	

語頭に ‘gh’ がくる語はすべて gh[g] 音である。

(2) 母音字による分類

-ough(t) を含む語	29	} 73
-igh(t) を含む語	24	
-augh(t) を含む語	10	
-eigh(t) を含む語	10	
そ の 他		17

2. Sound について

(1) ‘gh’ 音による分類

gh [g] 音語	14 (16%)
gh [f] 音語	10 (10%)
gh-mute 語	62 (70%)
その他の音	4 (4%)

'gh' [g] 音語は不必要に作られたか、借用語である。正規の変化によるものとしては [f] 音語が割ある外はほとんど黙字であるといえる。

(2) gh-mute 語の分類

[-ait] となる語	25	} 54
[-ɔ:t] となる語	19	
[-eit] となる語	10	
その他の音	8	

正規の音声変化が立証されるとともに、この点で 'gh' digraph と母音との関係が密接であったことを注目すべきであろう。

(3) 音節による分類

単音節語	68 (76%)
2音節語	19 (21%)
3音節語	3 (3%)

'gh'word は単音節で frequency の高い基本語が多く、逆に多音節語はほとんどが特殊な輸入語である。

根づよい etymological spelling の伝承は容易に打破し得ないようである。針小と考えてこころざした分野がわずかにその一端にふれただけに終わったことを痛感する。

参 考 書 目

末尾の () 内は本文中に使用した略号

- Ekwall, E. *The Concise Oxford Dictionary of English Place-Names*. Oxford Univ. Pr. 1960 (*Oxford Dict. of Eng. Place-Names*)
 市河三喜編「英語学辞典」研究社, 昭40.
 河合茂「英文法概論」京極書店, 昭14.
 Jespersen, O. *A Modern English Grammar* Vol. 1. Copenhagen. 1949 (*M. E. G.*)
 Jones, D. *English Pronouncing Dictionary*. 12th Ed. Dent, London. 1963.

- Onions, *The Oxford Dictionary of English Etymology*. Clarendon Pr., Oxford. 1966.
- Partridge, E. *Origins, A Short Etymological Dictionary of Modern English*.
Routledge & Kegan Paul, London. 1961.
- Robbie, H. &c. *Studies in Spelling*. Univ. of London Pr. 1961. (*Spelling*)
- Skeat, W. W. *Principles of English Etymology*. 2 Vols. Oxford Univ. Pr. 1891.
(*Principles*)
- Vallins, G. H. *The Making and Meaning of Words*. Adam & C. Black, London. 1949.
(*Making & Meaning*)
- Webster's *New International Dictionary*. 2nd Ed. "A Guide to Pronunciation."
Springfield, Mass. 1952. (Webster, *Pronunciation*)
- Wyld, H. C. *A History of Modern Colloquial English*. Blackwell, Oxford. 1956.
(*Colloq. Eng.*)
- Wyld, H. C. *The Growth of English*. J. Murray, London. 1925. (*Growth*)
- 安井稔「音声と綴字」英文法シリーズ 研究社, 昭39.